

大学図書館近代化の動き高まる

本年9月1日に文部省から発行された「わが国の高等教育」の中で、大学図書館の役割と問題点について、次のように指摘されている。

「大学図書館は、大学における教育および研究活動が活発に行なわれるようにするための基本的な施設である。すなわち、大学図書館は単に文献（図書・資料）を保管するにとどまらず、文献の効率的な利用を図り、積極的に学生、教官および研究者に協力すべき重要な役割を有している。

わが国の大学図書館は、戦後の新制大学発足当初の事情もあって、各大学間に大きな格差がある上に、各大学図書館の組織および機構が未整備であり、管理運営面でも非合理的な面が多く、その施設、設備の整備計画も教室、研究室等の整備が優先されてきたため、近代化の点で非常に遅れをきたしている（同書 113頁）。

大学図書館の近代化の遅れを克服するため、大学図書館関係者の努力が続けられていることは言うまでもないが、最近この近代化運動は各方面の強力なバックアップを受けつつある。

（1）大学設置基準等研究協議会 図書館特別部会

昨年9月、中央教育審議会の答申に沿って、新しい大学設置基準を再検討するため、文部省大学学術局大学課に大学設置基準等研究協議会が置かれた。そして現在の設置基準における図書館に関する項目がきわめて雑駁であることが指摘され、これを検討するため、4月23日の協議会総会で、図書館特別部会を置くことが決定された。

この特別部会には、本館から堀江館長が委員として加わり、今日まで、6月17、18日に第1回、6月30日、7月1日に第2回の会合が開かれ、協議会に対する中間報告がまとめられている。

（2）学校施設基準規格調査会 大学図書館小委員会

文部省管理局では、学校施設の基準ならびに規格を設定するために、学校施設基準規格調査会を設けて、調査審議しているが、大学図書館の施設基準の設定のため、大学図書館小委員会が38年秋から発足した。本館からは岩猿整理課長が専門委員として参加している。

委員会は毎月1回開催され、本年10月21日には、すでに11回目の委員会が開かれた。委員会ではこの1年間、大学図書館施設の根底となる大学図書館の機能、活動について調査、審議を重ねてきたが、このような図書館機能を生かすべき施設基準の検討に今後重点がおかれるであろう。閲覧人員、増加図書等の量的増大に悩まされ、さらに近代化への飛躍的脱皮をせまられている大学図書館関係者の委員会に寄せる期待は大きい。

（3）国立大学協会第1常置委員会

全国の72国立大学付属図書館で組織している全国国立大学図書館長会議は、1昨年来、国立大学協会に対して、大学図書館に関する特別委員を設置して、大学図書館の整備充実のための対策をたてるよう要望していた。これに対し、国立大学協会は4月25日の役員会でこの要望をとりあげ、第1常置委員会でこの問題を検討するよう付記した。第1常置委員会委員長は、その後本田弘人熊本大学長に変わった。9月25日、館長会議を代表して東大伊藤館長が本田委員長と、この問題について話し合いを持たれたが、本田委員長はきわめて好意的であったと伝えられている。

（4）日本学術会議

日本学術会議では、さる昭和36年5月、池田首相に対して、大学図書館の整備拡充について勧告を行ったが、その後も、ドキュメンテーション研究連絡委員会で、大学図書館の

問題が検討されてきた。

しかし、さらに大学図書館の近代化をおし進めるため、ドキュメンテーション研究連絡委員会のほかに、長期研究計画調査委員会を始め、5つの常置ならびに特別委員会から、1人づつ委員が出て、委員会連絡会議付置の「国立大学附属図書館に関する小委員会」（委員長北川敏男九大図書館長）が設けられた。この小委員会で、大学図書館の近代化のための基本構想が検討され、そこでまとめられた要綱が10月28日から開催された第42回の学術会議総会に、ドキュメンテーション研究連絡委員会ほか5つの委員会の連合提案として提出され、総会第2日目の39日に採択された。したがって総会后、大学図書館の近代化に対する勧告が、学術会議より正式に政府に提出されることになる。

私の読書と図書館

安井 郁子

苦しかった試験もやっと終りほっと一息ついたところである。これからしばらくは勝手に本が読めることがうれしい。なんでもいいから、むちゃくちゃに読んでやろうと思う。大学にはいったものの、本は読んでないし、なにもできないので、ひどい劣等感を持っていたが、そういう時いつも図書館へ行った。教養部図書室では自由に本がさわれないので不便だが、中央図書館では、特に閲覧室の中に開架図書室が移ってから、多くの本を手にとって見ることができるようになり、1回生のおわりぐらいからよく中央図書館へ行くようになった。

自分が失望してなんの気力もないような時や、勉強に疲れた時は、本棚のあいだをあちこち散歩する。ここにこんな本がある、これはおもしろそうだななどと思いながら、歩きまわっているうちに、多少なりとも心が満ちてくる。一生かかっても読めないことがわかっていても、なんとなくこの大きな知識のかたまりを全部吸収できるような気がしてくるのである。文学全集なるものを、今まで全然読んでいなかったが、友達の影響で、大学にはいってからゆっく

り読みだした。長編になると、始めの読もう読もうという気持が中頃でなくなり、早く終ればいいと思うようになってしまい、結局は筋しか読まないことになるのだが、それでも何か得たような気がしてくる。教養の1年の内に得たもののひとつに小説の味わいはいる。自分の読書範囲は狭く、自分の進む方面以外のものはほとんど読めない。いわゆる古典と名づけられているもの、その内でも哲学書にあこがれるのだが、自分1人でそれを読んでいくだけの力がまだできていない。広い閲覧室でそういう本を一心に読んでいる人を見ると、もっともっと勉強しなくてはとつくづく思う。

私にとっては図書館は、知識欲をかきたてられ、そしてそれを満たしていくことのできる場所である。図書館がもっと良くなるために、図書館に対する要望を書こうと思ったが、今のところすぐ実現できそうなものはあまりない。

場所の狭いこと（特に教養部図書室）、暗い感じがすること、冬の暖房のやり方と換気のこと。教養部図書室は本が少ない。そして中央図書館でも、実際自分のほしい本が少ないこと。開館時間については、日曜日もあけてほしいし、また土曜日の閉館時刻を8時までにしてほしいなどがある。しかし私達利用者も、雑談をやめ、本をていねいに扱って、お互いにより良い図書館を作るように協力しなくてはならないと思う。（医学部2回生）